

# 飛鳥寺南方の調査

—第152-5次

## 1 はじめに

本調査は、倉庫建設計画にともなう史跡飛鳥寺跡の現状変更に関わる事前調査である。調査地は、飛鳥寺の南東、寺域を画する南面築地塀SA535の南約30mに位置する。また、東約30mには飛鳥寺所用瓦を焼いた瓦窯の立地する丘陵が迫り、南方には飛鳥の諸宮が展開する。

今回の調査地の北約5mにおける1978年度調査では、飛鳥寺南限の築地塀、掘立柱建物、塀、木樋、石組溝などを検出している（『藤原概報9・10』）。なかでも2間×2間の総柱建物は、道昭が飛鳥寺東南隅に建立した禅院（通称、東南禅院）の経蔵に関わる遺構として注目を集めた。飛鳥池遺跡の北側で実施した1992年調査では、礎石建ちの基壇建物を検出し（『藤原概報23』）、所用瓦の検討などから、こちらが東南禅院の有力な比定地となっているが、1978年度調査地の重要性に変わりはない。

また飛鳥寺南方では、1956年度の飛鳥寺第2次調査、

1982・83年度の調査などで、西で北に7～8°方位が振れる幅約20.5mの「石敷広場」を検出しており（『飛鳥寺発掘調査報告』、『藤原概報13・15』）、その東延長線上に本調査区は位置する。

今回の調査では、1978年度調査で検出した遺構の南への連続性の有無と、飛鳥寺南方の石敷広場の展開状況の2点の解明を目的とし、L字形の調査区を設定した。調査期間は2008年10月28日～12月2日、面積は95㎡である。

## 2 検出遺構

**基本層序** 基本層序は、現地表面から順番に、①表土・耕土（約15cm）、②床土（約50～90cm）、③黒褐色砂質土（約10～30cm。調査区の東端のみ存在しない）、④茶褐色砂質土（約5～10cm。調査区の東西両端には存在しない）、⑤古代の各種整地土、⑥地山となる。調査区の東側には丘陵が迫ることもあって、⑤は岩盤を切り崩したような明るい黄褐色砂質土が用いられているが、調査区の中程から西側にかけては暗い茶灰色砂質土が⑤の主体をなす。調査区の四周に設けた排水溝を利用した断割調査の所見では、調査区の東南隅では整地土は厚さ約90cmに及び、他の地点では地山はまったく確認できない。地形的にみて、丘陵に迫る東端で約90cmの整地があったことからすれば、西側に向けて傾斜していく他の場所では、さらに厚い整地がなされていたと推定できる。

**遺構検出** 重機で②床土まで除去した後、中世の瓦器を含む③黒褐色砂質土で第一回目の遺構検出をおこない、幅約1m、深さ約30～50cmの斜行溝SD2017、素掘小溝数条（SD2016・2023・2025など）などを検出した。

つぎに③黒褐色砂質土を除去すると、調査区の東西両

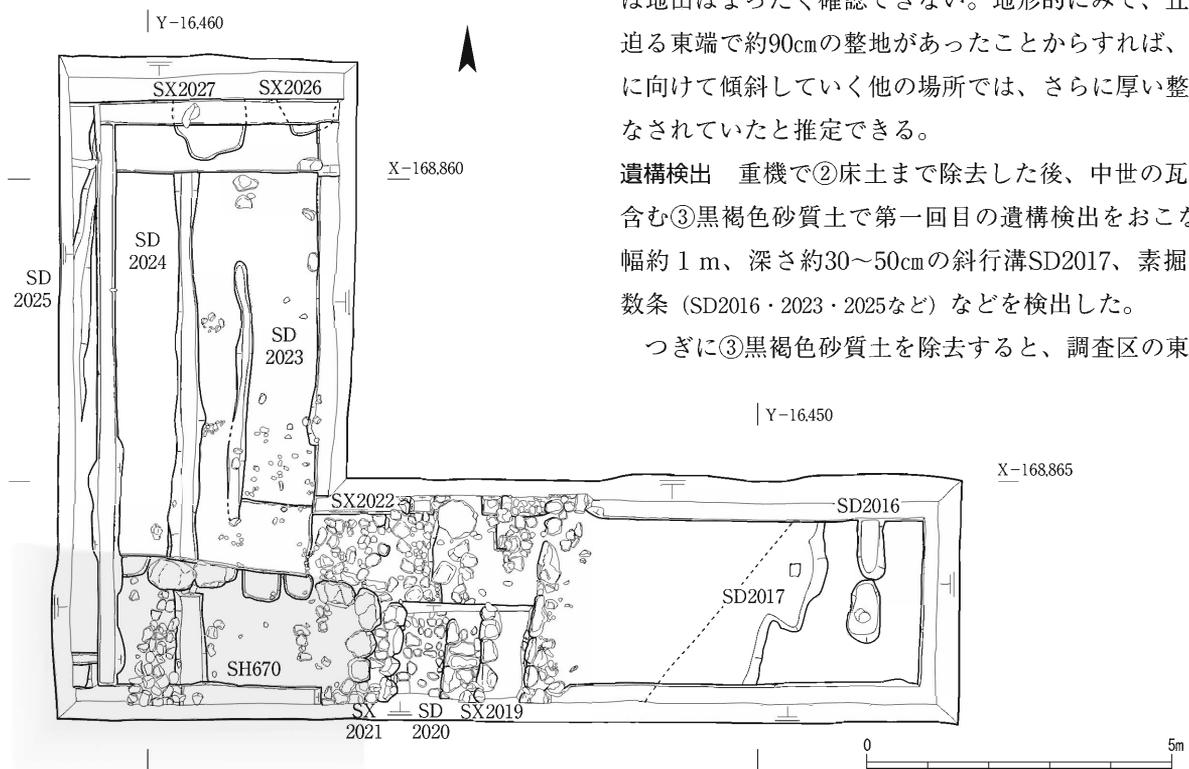


図97 第152-5次調査遺構図 1:125

端では古代の整地土が姿を現すが、調査区の中程では古代の包含層とみられる④茶褐色砂質土が覆っており、後述する石を用いた遺構は、一部その最上面がかろうじて確認できたにすぎない。そこで、④茶褐色砂質土を完全に除去し、⑤古代の各種整地土の最上面で遺構検出をおこなった。検出面は現地表下約70~110cmで、基本的に東はやや浅く、西が少し深くなっている。

整地土の最上面で検出した遺構、および、その掘り下げの過程で検出した主な遺構は、飛鳥寺南方に展開する石敷広場SH670、これと一連の造作になる石敷SX2021、石組溝SD2020、階段状遺構SX2019、そして、これらの遺構が廃絶した後の散石遺構SX2022などである。また、調査区の最北端において、排水溝を利用した断割調査によって、SX2026・2027を検出した。

以下、飛鳥時代を中心とする古代の遺構を報告する。

**石敷広場SH670** 前述した飛鳥寺南方の石敷広場の東延長上にあたる位置で、北の縁石と石の抜取穴を東西約9m分検出し、さらにそれが南に折れ曲がって2m以上続いていく状況を確認した。遺構の状況から、石敷広場の東北隅部と判断できる。縁石は人頭大よりやや大きめの花崗岩を用い、外側の面を揃えて据える。中世の土器を含む南北素掘溝SD2024と重複する縁石は、石の周辺部が少し掘り込まれていたが、石を動かすにはいたっていない。縁石よりも内側には、約20cm大の川原石が敷き詰められているが、後述する散石遺構SX2022に再利用されたり、後世の溝などによって破壊されたため、調査区の西南隅部以外は残存状況はあまりよくなかった。調査区の西南隅部では、良好な残存状況を示しており、平坦面をなすように石を並べている。

**石敷SX2021** 石敷広場SH670の東縁石よりも約15~20cm下がった、幅約20cmの犬走り状の石敷。北で東に7~8°方位が振れる。約20cm大の川原石を敷く。

**石組溝SD2020** SX2021の東隣に位置する、幅約70cmの石組溝。北で東に7~8°方位が振れる。溝底には10~20cm大の川原石を敷く。東西側石は約40cm大の花崗岩を1石ずつ使う。ただし西側石は石を立てるが、東側は石を寝かせているので、底石から側石の最上面までの高さは、西側が約35cm、東側が約15cmである。

**階段状遺構SX2019** SD2020の東隣に位置する、2段からなる階段状の石敷。SD2020の東側石を起点として、



図98 階段状の石組溝 (南から)

(A) 幅約60cmの石敷、(B) 高さ約30cm姿を現す側石、(C) 幅約50cmの石敷、(D) 高さ約30cm姿を現す側石と続く。いずれも北で東に7~8°方位が振れる。(A) は約40cm大の河原石、(C) は約20cm大の小型の石を主体とする。(C) は残存状況があまりよくなかった。

**階段状の石組溝** 上記4つは一連の遺構であり、いわば階段状の石組溝である。石組溝の本流は最下層のSD2020であるが、水量が多いときはSX2019・2021とSH670東縁石が一体となって、溝としての機能を果たしたとみられる。階段を構築する際、東西対称とはせず、西は2段、東は3段に側石を積んでおり、ステップも西は狭いが、東はややゆとりをもたせている。また最上部における東西側石の標高も、東に向かって高くなる地形に対処するためか、東が西よりも約10cm高い。東方における空間利用のあり方が注目されるが、今回の調査区では顕著な遺構を確認できなかった。道路の存在なども含めて、今後多角的に検討を進めていく必要がある。

なお本調査では、石敷広場の東北隅部を検出したが、その東縁に沿って設けられた石組溝は、向きを変えて石敷広場の北縁沿いを流れることなく、少なくとも今回の調査区内ではまっすぐ北に延びている。

排水溝を利用した土層観察の所見では、階段状の石組溝を構築する際、整地土を掘り込んだ形跡はとくに認められなかった。このことは、周辺一帯の整地作業をおこなうと同時に、階段状の石組溝を構築したことを物語っている。建設時期をおさえられる所見は得られなかったが、7世紀の飛鳥時代の可能性が高い。

一方、階段状の石組溝が埋没した時期は、最上層から9世紀頃の土師器皿が出土しており、この時期とみられ



図99 第152-5次調査区南半全景（西から）

る。もっとも、溝の中層からは藤原宮期の土器が出土しているため、この時期に埋没が始まった可能性もある。ただし、今回完掘したのは南北1.5m分にすぎず、埋没時期は今後の調査によって判断すべきである。

石組溝が最終的に埋没した後、多くの石が捨て込まれ、散石遺構SX2022が形成された。ぬかるんだ地盤を固めるためであろうか。石敷広場の石の大半は抜き取られていたので、これらの石を使用した可能性が高い。調査区の北縁には長さ約65cmの大型石があるが、石敷広場の縁石に由来する可能性がある。

SX2026・2027 調査区の最北端で検出した2基の柱穴もしくは土坑。整地土の途中から掘り込んでおり、7世紀でも比較的古い時期となる可能性があるが、出土遺物はなかったため、詳しい時期は不明。SX2026は直径約1m、深さ約50cm、SX2027は直径約1.2m、深さ約50cmである。埋土は、前者が暗灰色粘質土～粘土、後者が淡黄灰色砂質土を主体とし、土質はまったく異なる。

### 3 出土遺物

出土遺物は、平瓦181点（14.8kg）、丸瓦58点（4.9kg）、土器整理箱3箱、鉄釘4点、羽口1点である。瓦は小片が多い。丸瓦のなかには、筒部だけに模骨を用い、玉縁部は模骨の上端に粘土板を積んで作成し、その内面を横へラケズリした玉縁式丸瓦があり、飛鳥寺創建に近い時

期のものである。平瓦は粘土板桶巻き作りで、格子叩きや平行叩き、縄叩きのものなどがある。土器は、古代の土師器、須恵器のほか、中世の土師器、瓦器などがあるが、いずれも小片で図示できない。

## 4 まとめ

本調査は小面積であったが、飛鳥寺南方の石敷広場の東北隅部を検出したことが最大の成果である。その座標は、X-168,866.7、Y-16,456.1であり、飛鳥寺の中軸までは石敷広場の振れに沿って約62mとなる。

また、石敷広場の東縁に沿って階段状の石組溝が形成されていたが、よく似た遺構は南縁でも検出している（1983年度調査、『藤原概報15』）。すなわち、石敷広場の南に接する石敷SX671、その南に接する石組溝SD662である。だが今回検出したものとは構造が異なり、石敷広場に接する面のみ階段状となる。また石敷SX671は幅約75cmあり、それに相当する今回検出したSX2021が幅約20cmにすぎないのに比べ、幅広である。なお石組溝はSD662とSD2020との間に顕著な違いはない。

一方、石敷広場の北側では、過去の調査で階段状の石組溝はみつかっていない。今回の調査でも、階段状の石組溝は北へ延びることを確認するとともに、石敷広場の北縁にはこうした遺構はないことを再確認した。西縁は未調査で不明だが、少なくとも石敷広場の南縁および東縁を階段状の石組溝がめぐっていたことになる。

ただし、今回の調査区のすぐ北側の1978年度調査地では、階段状の石組溝に対応する遺構を検出していない。逆に、南に延びる別の石組溝や木樋などをみつけているが、今回の調査区では確認できなかった。未調査となった約5mの間で状況が劇的に変化することになるが、その確認は将来の課題とせざるを得ない。

また今回の調査区では、階段状の石組溝より東側で古代の遺構は確認できなかった。飛鳥の東の丘陵の裾部には南北方向の古代道路が存在し、その側溝となる石組溝を南方の各所（飛鳥京跡、酒船石遺跡、飛鳥寺南方遺跡）で検出している。この道路は地形に沿って緩やかに彎曲しているため、北側にどのように延びるか不明であるが、そのひとつの候補として、本調査区内の東部をあげることも可能である。その当否は周辺の発掘調査成果を見守りつつ、判断していく必要がある。（市 大樹）

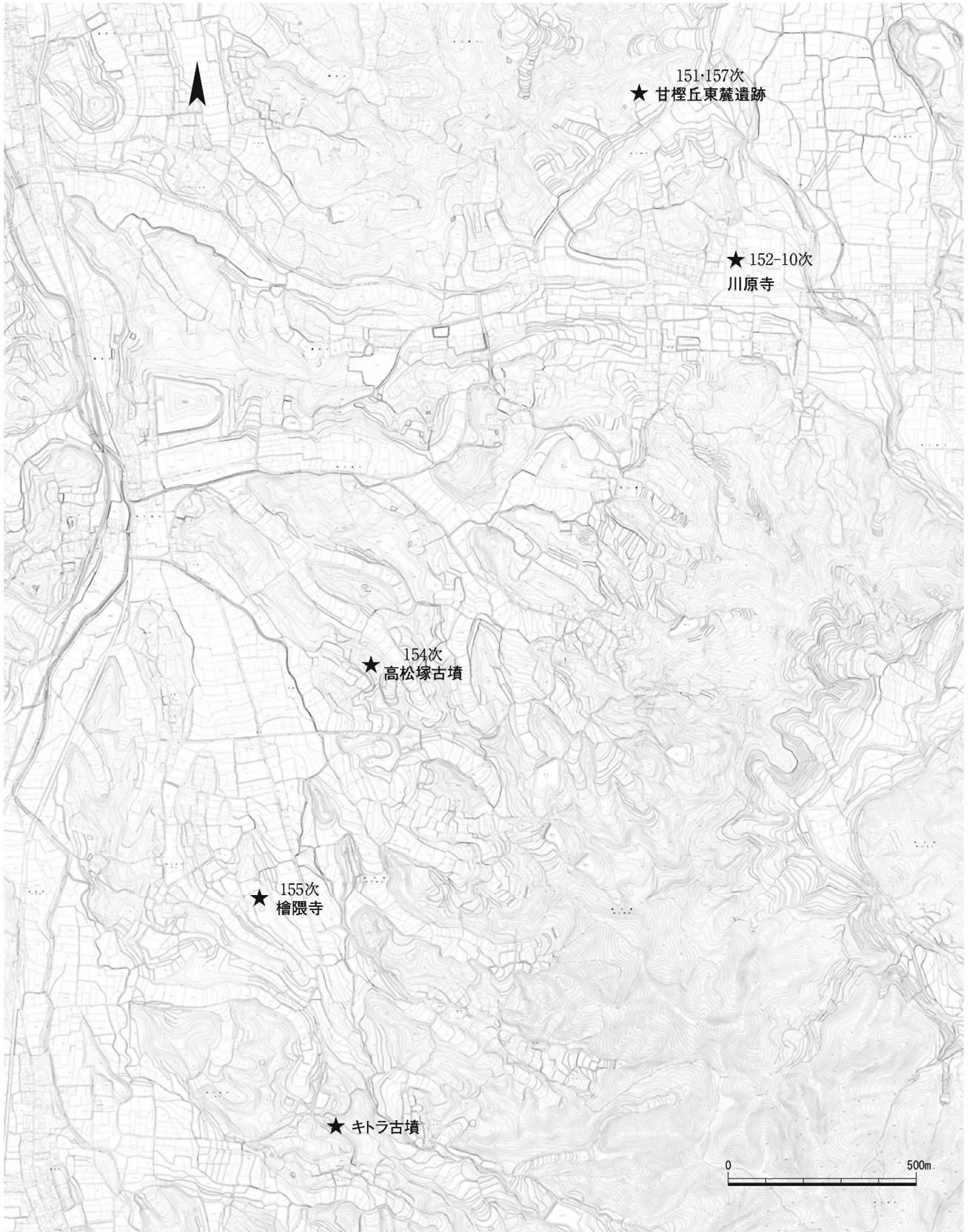


図100 高松塚古墳・檜隈寺周辺の地形図 1 : 15000